
マロなお嬢と、召使い。

蛇足

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マロなお嬢と、召使い。

【Nコード】

N8192X

【作者名】

蛇足

【あらすじ】

江戸幕府が長きに渡り権力を誇示し続けている世界では、神は人に仕えるという。そんな世界で出会った、武士の娘でありながら京の都で育ったが故に鷹気質^{マロ}になってしまったお嬢様と、お嬢様に仕える記憶喪失の少年の話。

はじめに

——とある世界には、日本が米国に負ける歴史があるという。

——またとある世界には、日本が米軍に勝つ歴史があるという。

動物が生きる世界はひとつではない。

世界はいくつも存在しているという。

——これは、江戸幕府が黄龍と青龍・白虎・朱雀・玄武を味方に
つけ、今上帝と宮家が日本を守る神々を味方に付け『不沈の島』と

列強諸国より恐れられ、長く長く幕府による統治が続いた世界の話。

※史実、時代背景まったくの無視で、その他日本神話についてもまったく無視しておりますので、突っ込みたいところ満載かもしれませんがお許しください。

1 黄河

——冬の夜空に星がきらめく。

吐いた息は瞬時に白く濁り、鼻の頭や耳はじんじんと痛む。

向かいから流れてくる強い北風が、“俺が”身に纏った鮮やかな色合いの“振り袖”をさらって逃げていく……

この寒さでは雪が降るのも時間の問題だ。

(…早く用事を済ませて店に戻ろう。)

草履の鼻緒に足をぐっと押し込んで、着物がはだけないように小走りで目的地へと向かう…

しかし、少年はすぐに来た道に戻る事となった。

「お黄^{こう}ちゃん！待ってえ」

自分を必死にに追いかける足音に気付いたからだ。

「胡蝶さん？」

着物の裾を翻して走る彼女のもとに駆け寄ると、胡蝶は力が抜けたかのように地べたに座りこんでしまった。

「胡蝶さん?!」

慌てて顔色を伺うと、彼女は自嘲ぎみに笑って顔の前で手を横に振った

「大丈夫…。ただ走って疲れただけ。」

「でも…」

「大丈夫ったら大丈夫。それよりこんな道の真ん中でしゃがみこんでる方がダメね。」

ふと顔を上げて周りを見ると、綺麗に着飾った派手な着物の二人組を囲うように人だかりができていた…

『ありや秀華屋しゅうかやの胡蝶じゃないか？』

誰かが一言呟いた瞬間

『秀華屋の胡蝶が見れる』

今夜の江戸はこの話題で持ちきりになった。

江戸の街の中でも5本指に入る高級店秀華屋のトップ胡蝶は、幕府

の上層部の“酒の相手しか”しないお高い女として有名だった。

それがこんな街中でお目にかかれる……というのが、民衆の気持ちだった。

「あなたはもう少し考えて行動してください。」

あのあと、すぐにその場を離れ、店の裏口から胡蝶を部屋に戻して、“お黄”こと黄河こうがは説教を始めていた。

胡蝶は、客以外：男子禁制である秀華屋に男である黄河が忍び込んでいるという秘密を知っている数少ない者のうちの一人だ。

「まあまあ、黄河くん、そんなに怒らないで」

「怒らないでってあなたがっ！」

イライラする黄河の口もとに、胡蝶は人差し指をあてる

「男の子はそう怒鳴るものじゃないわ。」

（この人はっ！！）

心の中で悶絶する黄河を知ってか知らずか、胡蝶は唇から指を離し、一冊の本を取り出した

「黄河くん探してたら、料理人さんが『黄河なら、ついさっき山田酒店にお使いに行った』っていうから、これを源さん^{げん}に届けて欲しくて慌てて追いかけたの。」

差し出された本には、ただ一言『東京』と書かれていて、作者の名前などは一切ない。

「分かりました。届けますから、あなたは大人しくしてください。」

受け取ったものを丁寧に風呂敷にくるむ。その姿を眺めていた胡蝶が申し訳なさそうに口を開いた

「あともうひとつお願いなんだけど、あの子が元気にしてるか…見えてね。」

「そちらは言われなくても分かっていますよ。じゃあ行ってきます。」

「うん。気をつけて。」

一番上の階に作られた胡蝶の部屋から、一番下の階に下り土間に草履をおろして鼻緒にぐつと足を押し付ける。

重い引き戸をゆっくりと開けて、外に踏み出すと、予想通り、雪が降っていた。

（…寒い。だから早く済ませて帰ろうと思っていたのに…胡蝶さんの阿呆。）

手にしていた風呂敷を抱え直して、黄河は、我が物顔で歩く酔っぱらいの往来の中を縫うようにして歩いていった。

胡蝶さんが源さんに渡して欲しいと俺に託した風呂敷の中身…正直、胡蝶さんがこんなもの読んでいたなんて驚きだ。

『東京』という本は、著者不明の本で

——我々が江戸と呼んでいる街を、東京と呼ぶ世界があることをあなたは知っているだろうか。

……という、ぶっとんだ書き出しで始まる一斉を風靡した本だ。その続きはこう…

——住んでいる人間の姿や地理は似ていれども、街の情景は全く違う。

東京という場所には雲をも突き破らんとする高い建物があり、夜の灯りとりやそこでの生活は電気が中心であるとのこと。

逆に江戸は、幕府が極端に外国との関係を持たない政治を続けてきたため、重油などの資源の輸入ができず、炭坑等の資源が底を尽きる心配から電気主体の生活ができない。

故に江戸は、並ぶ建物は木造やレンガ造りの物が多く、夜の街の灯りは店の軒下にぶら下げられた提灯やランタンが主だ。

江戸の街に存在する電化製品といえばテレビのみで、それも江戸の電気の発電量が少ないというのを理由に一家に1台という法律がある。2台目から1台ずつに膨大な税金を納める必要があるため、2台ある家はほんの少し。また、東京に存在する離れたところにいる人とも会話ができる携帯電話という便利な道具も夢のまた夢。

人に乗せて動く鉄の箱…自動車もちろん江戸には存在しない。だから江戸の人の移動はもっぱら徒歩や馬。

——という風に、江戸と東京の違いを書き記し、それまでの歴史や文化を綴る……。そして終盤にさしかかり、江戸の人々が度肝を抜く言葉を、この本の著者は残している。

——どうして江戸と東京はこんなにもかけ離れた世界になってしまったのか、それはすべて幕府もとい將軍のせいである。

黄龍と四神の庇護のもと、兵器を使用した他国の侵略を許さず、日本の民に犠牲がなかった点は大いに評価しよう。

しかし、外国を締め出し、外国の秀でた文化を締め出し、テレビというたったひとつの小さなものしか受け入れなかったというのは、電気うんぬん関係なしに民が外国からの影響を受け反乱を起こされるのを避けたかっただけなのではないだろうか。

江戸の現状は、民の幸福を考えず、己の保身に走った將軍の引き起こした最悪の結果ではないだろうか。

確かに、東京という世界では、戦があり…多くの民が命を落とすこととなった。しかし負けたことがすべてではない。得たこともたくさんある。

現に、將軍の消えた世界には自由な東京という街が生まれ、將軍が

残る世界には縛られた江戸という街が育った。：相反する物になつてしまったのだと私は思う。

だから声を大にして言おう、『江戸幕府討伐』と。

——途中までは確かに面白かった。でも、この最後の一文に面食らった者は多いはず。

黄龍と四神という伝説の生き物を味方に、天涯無敵の五霊壁ごれいへきを抱える江戸幕府。

太古より日本を守りし神々が味方し、民を守る三護神さんごしんを頭にたくさんの神使いを抱える宮家。

東の江戸と西の京に別れつつ、それぞれが役割を果たす彼らに、日本の民は絶対の信頼と敬意を向けている。

だからこそ、日本を愛し、住み続けたいと願うのだ。だから、江戸幕府討伐だなんて大反れたことを考えるやつはなかない。

……考えながら歩くこと15分……ようやく目的の場所に着いたらしい……。

“ 山 田 酒 店 ”

久しぶりに見る看板は、相変わらず錆び付いていて、台風でもきた暁には、この通りで一番先にぶっ飛んでいきそうなほどだ。

しかし、

(…始まりの土地。)

そう思うと、おんぼろな佇まいも不思議と神々しい光を放っているように見える。

かなりの間、自分の店の看板を見上げたまま動かない客を不振に思ったのか、店主が野太い声をあげた。

「お客さん、なんか用事かい？」

牽制するつもりで掛けた声に、意外にも軒先の客は嬉しそうに身をよじった。

「源さん、お久しぶりですなあ。」

わざとらしく“振袖”で口元を隠してにこりと微笑みかければ、ゲンちゃんと呼ばれた人は盛大に眉を潜めた。

「黄河、やめんか気持ち悪い…。」

「気持ち悪いとは、失礼な物言いですなあ。それに今のわたしは、黄河違います。“お黄”です、オ・コ・ウ！！何度同じ事言ったら分かるのかねアンタは。…ああもう、せっかく久しぶりに顔見せよ思ってたのになんでこんなお説教してるの。挨拶よ、挨拶。」

膝を軽く曲げて、醜態をさらさぬよう前身頃を押さえていた手を太ももの上で組み、頭を下げる

「源さん、お久しぶりでございます。」

結った髪にさされていたかんざしの飾り達がぶつかってチリンチリンと可愛い音を立てた。

.....

.....

.....

「お前が店の前にぶっ倒れてんの見つけてからもう1年か…」

月日^{げんえもん}が経つのは早いもんだな。そう呟きながら、源さんこと山田源^{やまだ}右衛門は茶をすすする。

…店の奥の茶の間に通され、源右衛門と向き合う形に腰をかけたのは5分程前のこと。二人が定位置に着くやいなや、源右衛門の娘^{はなの}の花乃が茶を運んできた。茶を各々の前に置いた花乃は部屋の隅に控えている。

「その節はお世話になりました。働き先まで面倒見ていただいて…」

頭を下げると、再びかんざしがチリンと鳴った。

「いんや、礼には及ばん。こちらも胡蝶に娘を寄越せと言われて渋っていた所だったし、お互い様だ。」

胡蝶さんは客をとりつつ、秀華屋の支配人もしていて、ちょうど1年前に店が人手不足で回らないとの理由で源さんの娘さんを一生懸命勧誘していたのだった。

「源さんに、『ここに行け』って何の説明もなく地図だけ渡されて…、迷いながらようやく着いたと思って店入った瞬間『男は呼んでない!!』ですよ。びっくりしました。」

「胡蝶はああ見えて気が荒いからなあ」

「いやいや、突っ込むべきはそこじゃなくて……男の俺を女性の職場に送り込んだところでしょ。」

そう言いながら、眉間を押さえる仕草はとても優雅で、手を上げた際につられて動いた薄い黄色に大輪の牡丹の花を散らせた柄の振袖は黄河によく似合っていた。

「なんやかんや似合ってるじゃないか。花乃もそう思うだろう？」

突然話を振られたにもかかわらず驚くこともなく花乃は微笑みながらうなずいた。

その様子を見て源右衛門は小さくため息をつき、視線を黄河に戻す

「黄河、花乃を嫁にもらってくれねえか？」

「っ！！俺が花乃さんをですか?!」

噴出しそうになった茶を慌てて飲み込んで、一部口の脇から漏れて垂れる茶は手の甲で拭う。

「お前以外にここに誰がいるってんだ。」

「いやでも俺まだ16ですよ、花乃さんだってまだ14歳でしょう……」

口に手の甲を当てたままだった黄河の振袖はするする手首から落ち、

腕があらわになる。

それは、女の子というには遅し過ぎて、男というには頼りない少年の腕だった。

「だいいち花乃さんは俺でいいんですか？」

はっと後方に控える花乃を振り向いて、黄河がそうたずねれば

花乃は頬を朱色にそめて頷いた。

「はい。1年前、はじめてお目にかかったときから、お慕いもうしております。」

（うっ…これは…本気の目だ）

俺を見つめる瞳から目をそらして、彼女の父親に真意を問う

「源さん…。何かあったんですか？」

「どういう意味だ？」

「…あなたのような人が、俺のような1年前にひょっこり現れた記憶喪失の男に大切な箱入り娘を渡すわけがない。」

1年前、この山田酒店の前で意識を失い、源さんに拾ってもらった。目が覚めたのも、この茶の間だった。かろうじて覚えていたのが自分の名前、それ以外は思い出せなかった。

「俺は…罪人かもしれないですよ？」

誰かを殺して、逃げている最中だったかもしれない。

だが、そんな不安をかき消すように源さんは力強く言った

「それはない。」

「…どうしてそういいきれんのですか。」

「俺の直感がそういっているからだ！」

（…直感って…そんなの信じられるわけがない。）

そんな気持ちを讀まれたのだろうか

「では、当ててやろう。その中身、」

源さんは声に似合った太い指で、俺の脇におかれた風呂敷を指差す

「東京、という本だ。」

「……………どうしてわかるんですか？」

「直感だ。」

包みを開けて、中から本を取り出して差し出した

「胡蝶さんから、源さんに渡すように頼まりました」

源右衛門はそれを片手で受け取ると、脇に投げやり、話題を戻す。

「で、花乃のことはどうなんだ？」

「…すみません…俺には無理です。…いつまでも秀華屋で働けるわけじゃないし、俺には花乃さんに不自由ない暮らしをさせてあげられるか…」

思ったことを正直に告げると、目の前で盛大なため息をつかれた

「……………花乃、これで満足か？」

「…はい、お父様。」

……………後ろを振り向けなかった。

静まり返った部屋の中で泣き声を堪えた花乃さんの苦しそうな息遣いだけがやけに耳に響いた。

俯いたまま、どれだけの時間が経っただろう

静寂を切り裂いたのは、源右衛門だった。

「黄河、」

「……………はい。」

「俺はお前を責めるつもりはない。逆に謝らなければならないんだ。黄河も、花乃も、…今まですまなかった。」

大きな体の頭と上半身が、畳に着くんじゃないかというくらい、深い深いお辞儀だった。

上げられた顔には、いつもの勇猛さはない。

「黄河、お前に次の仕事先を紹介する。」

「……………え?」

「秀華屋には花乃をやる。」

ただ一言そう言って、封筒を押し付けてきた。

「お前が嫁にもらってくれれば、花乃を秀華屋にくれてやることもなかったんだが…」

「えっ？ちよっ源さん?!」

「頼まれてた日本酒は、店に分かるように置いてあるから、持っ
け。じゃあな。」

「ちよっと!」

一方的に話を打ち切られて、源右衛門と花乃は茶の間から出て行っ
てしまった。

目前で閉められた襖を慌てて開けるも、廊下に二人の姿はすでにな
い。

茶の間には、封筒と俺だけになってしまった。

「…まじかよ…嘘だろ。」

——茶の間から店にうつり、台の上に置かれた日本酒のビンに手を伸ばした。

手に取った一升瓶に貼ってあるメモに目が留まる

（俺が…花乃さんを嫁に迎えば…それですべてが丸く収まるのか？）

そこには丁寧な花乃さんの字で“秀華屋様、お世話になっております”そう書いてあった…。

彼女がもう二度とこの文言を書くことがなくなってしまうのは…俺に責任があるのだろうか？

「黄河様。」

俯いていた顔を上げ、声の方を向くと、優しげな顔の少女が立っていた

「…花乃さん」

「私も父も、黄河様のせいだなんて思っていないません。」

花乃は黄河の手に握られていたビンを取り、貼ってあるメモをはがした。

「私には…はなからこんなもの書く資格ないんです。」

「どうしてそんなこと言うの？」

「…私のこと、本当はご存知なのでしょう？」

その問いかけに答えなかった。答えられなかった。知らない振りをしていたかった。

「…あの人はもう長くない。」

ぽつりとささやいた彼女の瞳が悲しみの色に染まる

「いつか親孝行をしてみたいと思っていたのです…ようやくその夢を叶えることができる。」

そういつて苦笑する彼女は俺の返事も待たずして店の奥へと消えてしまった。

…本心かどうかなんて分からない。

でも、嘘だとしても、自分の肩がすっと軽くなった気がした。

——それとは一転、帰り道の足取りは非常に重い。

うつすらと積もった雪が溶け、水溜まりやぬかるんだ土で上手く進めず、歩く気力がどんどん削がれていく。

ようやく秀華屋にたどり着いたと思ったときには、すでに客はまばらになっていた

「お黄ちゃん、遅いわよー」

割烹着姿の小太りなおぼさんが濡れた手を前掛けで拭いながら小走りでやってくる

「すみません。山田酒店の旦那さんに捕まっちゃって…」

「まったくあそこの旦那ときたら年甲斐もなく若い女の子引っ掻けようとしてほんとどうしようもないねえ。」

差し出した瓶を、ふくよかな丸い指が呆れながら受け取った。顔の高さまで瓶を持ち上げ貼ってあるラベルを確認、視線を瓶から俺にうつし

「お黄ちゃん、おつかいご苦労様でした。またよろしくね。」

この一言でおつかいが終わる。

“またよろしくね”

俺に次なんてないのに…

「分かりました。失礼します。」

…いつも通りに返事をしてしまった。

いままでありがとう、その一言も言えなくて、いつも通りに厨房と廊下を仕切る暖簾に手をかけた。

背後から聞こえてくる、皿の当たるカチャカチャという音も鍋の煮えるコトコトという音も、ここで働く人達の笑い声も、もう二度と聞くことはないのだろう。

(…さようなら。)

きしむ階段をとぼとぼ登る。

(…不思議な気持ちだ)

たった一年しかいなかったのに、この場所を離れたくないと思う

(…これが“愛しい”?)

(…これは“寂しい”?)

もはや、自分が何階にいるのかさえ分からなかった。

「お黄ちゃん。」

ふと名前を呼ばれ、顔をあげれば、階段の先に女性が立っていた。

その人は朱色の壁を背に、漆黒の着物に身を包みこちらを見ている。

「あなた、ここを離れるのが寂しいの？」

「…これは寂しい？」

自分の感情が理解できていない少年に、胡蝶は思わず苦笑する

「いまは分からなくても、いつかわかる日が来るわ。」

1年前に落ち込んでいた彼を慰めたときと同じように、頭を撫でてやろうと近寄って頭に手を伸ばしたがその手は頭に届かなかった…

（…背が伸びたのね）

仕方なく肩に手を乗せ、ぽんぽんと叩く。厚みのある骨ばった肩だった。

（…これからもっと男らしくなる）

一年前ここに来た時は、体の線が細くて心配したものだけど…体はもう心配する必要はないようだ。

あと心配なのは情緒だろうか…彼には、憎しみや怒りはあるものの、悲しみや愛がない。

私には、それを教えてあげることにはできなかった。

…でもね

「いつか巡り会える。」

あなたに全てを教えてくれる人に、いつか巡り会える。

「だから頑張りなさい。」

「？」

彼の目がきょとんとしたのを見て、思わず顔が綻んだ

「えっ胡蝶さん何で笑うんですか?!」

「何でもない、何でもないのよ」

「何でもないなら笑わないでくださいよ。」

「あらー何これ、恋文？」

白い指が黄色の着物の懷のあわせからちよこんと顔を出していた封筒を掴み取った。

「ちがつそれはっ…あつ待ってくださいよ!!」

手紙を片手に部屋の中に飛び込んだ胡蝶は、静止の声を振り切って、封筒を開いた。

慌てて追いかけた黄河の努力のかいもなく、彼の目の前で乾いた音とともに中から手紙が抜き出された――

「黄河くん…これって……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192x/>

マロなお嬢と、召使い。

2011年11月15日08時09分発行